

(論文内容の要旨)

本学位申請論文の目的は、アメリカ合衆国の社会で「黒人」とよばれるアフリカ系アメリカ人が、黒人らしさ **blackness** を実践する意義について考察することである。かれらが黒人らしさを実践する理由は、アメリカで支配的な白人・キリスト教文化からの抑圧にたいする抵抗であるという立場が優勢を占める。このように、黒人らしさを抵抗という視点から論じる研究には、白人中心主義的（白人至上主義的）な視点から捉えたアフリカ系アメリカ人のイメージを留保し、異なったアフリカ系アメリカ人のイメージを提示できるという利点がある。このイメージ転換の法則にしたがえば、たとえば白人の奴隷主のもとで虐げられてきたニグロ（黒人）は、多様な手段をもちいて奴隷主に抵抗していた能動的なニグロへと読みかえることができる。同様のことが、現代の黒人らしさについてもいえる。

ただし、こうした先行研究には3つの問題点が指摘できる。まず、アフリカ系アメリカ人を抵抗する存在と捉えることで、そこから逸脱するような人々や行為を無視したり、矮小化したりしてしまうことである。つぎに、抵抗を政治的实践と同一視することで、アフリカ系アメリカ人の多彩な生活実践の動態を無視する、あるいはその一部のみに注目するという傾向である。最後に、黒人運動と密接に結びついているアフリカとの関係についても十分な議論ができていないことが指摘できる。

そこで本論文では、こうした問題点を克服することを念頭に、アフリカ系アメリカ人のオリシャ崇拝運動を考察する。この運動は、1950年代後半のニューヨークで結成され、1969年にアメリカ合衆国南東部のサウスカロライナ州に「オヨトゥンジ村」とよばれるコミュニン（生活共同体）を創設した。このオヨトゥンジ村は、黒人のための国家の創設とアフリカ文化の復興を果たすために建設された。そこでは、アフリカ系アメリカ人が、オリシャとよばれる西アフリカの Yoruba 人の神々を崇拝し、Yoruba 人の伝統的な生活様式を再現しようと厳格な規律のもとで集団生活をいとなんだ。

本論文は、序論・本論・結論の9章から構成されている。本論の第2章「本論文の背景」では、調査地や対象の概略を述べる。第3章「オリシャ崇拝運動の前史」と第4章「オヨトゥンジ村を中心にしたオリシャ崇拝運動」では、オリシャ崇拝運動が形成され、繁栄した後、同村が一転して衰退していく過程を示し、オヨトゥンジ村を中心にした運動の変遷について論じる。つづく第5章「ハウスにおけるオリシャ崇拝」と第6章「ハウスとオヨトゥンジ村とのつながり」では、オヨトゥンジ村が衰退し、村を離れてアメリカ社会に戻った成員が、フロリダ州に設立したオリシャ崇拝のハウス（宗教上の家族関係を軸にした崇拝組織）に注目する。そして、日常生活でどのような宗教実践が行われているのかを記述、分析する。第7章「ハウスとヨルバランドとのつながり」と第8章「ヨルバランドとの相互交渉がオリシャ崇拝運動に与える影響」では、オリシャ崇拝運動が、ナイジェリアのヨルバランドとどのように関わっているのかを検討する。

本論文からは以下のことが明らかになった。

(1)オリシャ崇拝運動は、1950年代後半に、「反白人・反キリスト教」主義を標榜して組織化され、集合的な運動が実践された。その後、この運動は、1980年代半ばにオヨトゥンジ村から成員が大量に流出するという転換期を迎えたが、「反白人・反キリスト教」主義と、集合的な運動実践という形態を変化させながら、現在もなお展開されている。黒人らしさを抵抗とみなす視点にしたがうならば、この変化はオリシャ崇拝運動の衰退に見えるかもしれないが、決してそうではない。この運動は、ナイジェリアにあるオリシャ崇拝の組織と宗教実践をつうじて交流することで、さらに発展している。

(2)アメリカ合衆国の黒人にみられる黒人らしさとは、礼賛されるにしろ非難されるにしろ、アフリカのイメージと関連づけて解釈されてきた。そのアフリカのイメージとは、西洋の非西洋にたいする眼差しを踏襲し、文明にたいする未開・野蛮、文化にたいする自然、という価値観で構成されていた。そのなかで、オリシャ崇拝者は、アフリカを文明と文化で捉え直すことで黒人らしさそのものを定義し直した。これによって、黒人らしさの実践とは、もはや抑圧的な白人の支配文化にたいする抵抗ではないことが明らかになった。それは、能動的に実践できる伝統や文化を創り出し、その伝統や文化を共有する共同性を生み出すことになったのである。オリシャ崇拝者は、この共同性にもとづいて築かれた社会空間にかぎってはああるが、社会の周縁ではなく中心に身を置くことができる。さらに、かれらはオリシャ崇拝を実践することで自己と他者とのあいだに信頼関係を築き、つながりの感覚を創出している。このつながりの感覚は、アメリカ合衆国のオリシャ崇拝者のあいだにとどまるだけではなく、固定的な民族や宗教の枠組みをこえてひろがる可能性を呈している。

(3)オリシャ崇拝運動では、アフリカ系アメリカ人とアフリカ（ナイジェリアのヨルバ人）との文化接触が相互交渉的に行われている。この背景には、真正なオリシャ崇拝をめぐる両者のやりとりが認められる。なお、こうした両者の相互交渉をきっかけにして、オリシャ崇拝運動とそれに触発されてアメリカ合衆国の各地に根づくハウスは、人種的、宗教的に包摂的な空間を形成し始めている。

氏 名	小池 郁子
-----	-------

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、1960年代末から興隆を迎えるアフリカ系アメリカ人の宗教・社会運動（オリシャ崇拝運動）を研究テーマとする。申請者の小池郁子は、かれらの運動の拠点であるサウスカロライナ州とフロリダ州を中心に文化人類学的調査を行い、その歴史的変遷や宗教実践の実態、アフリカ（ナイジェリア・ヨルバランド）との交流の様態を明らかにした。その学術的意義は多岐にわたるが、あえて挙げるとするなら以下の4点である。

第1に、本論文が文化人類学的常識を打ち破ったことを指摘したい。文化人類学は、従来欧米の研究者による非欧米社会の研究が主であった。そのような傾向は近年かなり変化してはいるが、文化人類学が非ヨーロッパ、非「文明社会」を対象とする学問であるという考え方は、当の人類学者においても根強い。本論文は、たんに「文明社会」を選んだ、というだけでなく、アメリカ合衆国のアフリカ系アメリカ人社会を選んだという点で独創的である。黒人研究（ブラック・スタディーズ）という学問がないわけではないし、都市研究やスラム研究においてアフリカ系アメリカ人についての考察がなされてはきた。しかし、それらはどちらかというと社会学者の研究であり、研究者自身がアフリカ系アメリカ人か、そうでなくても、アメリカ人であった。アメリカ人から見れば、本来研究対象となるような日本人がアメリカ社会で研究を行ったというのは、革新的なことであった。この点で、小池の研究は、すでにアメリカ合衆国の研究者からも注目を浴びている。もちろん、日本人研究者の中にはアメリカ社会で文化人類学的な調査を行った者もいる。しかし、それらはほとんどアメリカ社会における日系人の研究やそれ以外の移民社会の研究に留まっていた。この点でも小池の研究は評価に値する。

第2に、宗教・社会運動論に関する独創性である。文化人類学の下位部門である政治人類学においてマイノリティ研究は抵抗論ときわめて密接に結びついてきた。またアイデンティティ・ポリティクスがその中心的主題であった。いかにして、マイノリティはみずからのアイデンティティを維持し、また創出する形で政治集団として権力獲得に成功するのか（あるいは失敗するのか）が多くのマイノリティ研究において論じられてきた。しかし、現実問題として、アイデンティティの強化は、マイノリティの立場を固定し、さらなる差別や弾圧を招く。これを避けるためには、マジョリティに同化するしかないのか。本論文は、同じような問題意識のもと、同化か抵抗かという二者択一的に論じられてきたアフリカ系アメリカ人の社会運動の分析において新たな可能性を示唆している。それは、オリシャ崇拝運動家たちが、アフリカ系アメリカ人としてのアイデンティティを反白人・反キリスト教という形ではなく、自分たちの伝統としてヨルバ社会の文化・宗教を実践する、より開かれた形のアイデンティティ形成を目指すことで、孤立することを回避しているという事実である。これは、運動論の分析に新たな方向を示唆すると同時に、ほかの社会運動にも適用できるという意味で、より実践的な考察といえる。

第3は、民族誌的記述の質に関係している。本論文は、運動を主題としているが、直接運動に関係のないような宗教実践をこまやかな視点から記述・分析している。これによって、とすれば一面的になりやすい記述を豊かなものになっている。それは、アフリカ系アメリカ人を運動家以前に、生活者として理解したいという著者の強い意志の表れである。これによって、オリシャ崇拝運動に携わるアフリカ系アメリカ人たちの生活実践が明らかにされている。それはまた、かれらがいかに過酷な環境で生活しているかをわたしたちに示している。かれらが白人社会からの差別、警察による暴力、またキリスト教徒であるアフリカ系アメリカ人からの無理解などに曝されていることが、具体的な事例を通して分析されているのである。

第4は、アフリカとの関係に新たな分析視点を提示したことである。アフリカ系アメリカ人の社会運動はアフリカとの関係（想像上にせよ、実質的にせよ）と切り離せない。オリシャ崇拝運動家たちは、実際にアフリカに渡り、そこでイニシエーションを受けることで従来とは異なるアフリカ社会との関係を築くことに成功した。本論文はその実態に鋭く迫っており、主たる調査地はアメリカ合衆国であるが、グローバル時代にふさわしい広がりをもつ研究である。

以上のように、本論文は一級の民族誌であるとともに、理論的にも独創性に満ちているという点で調査委員・専門委員の意見が一致した。文化・地域環境学専攻は、諸文化の相互理解を深める方策を探求するために創設されたが、その設置目的にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年7月3日、論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。